

第八話

(一) 佛道修行とは二王不動の大堅固の機を修する事也

(二) 修行と云うは強き心を用いる事也

丸川 春潭
延時 真覺

(一) 佛道修行とは二王不動の大堅固の機を修する事也 (上-3)

いちにちしめ いわ ぶつどうしゅぎょう い に おう ふう だいけん ご き
一日示して曰く、佛道修行と云うは二王不動の大堅固の機
う しゅ ことひと なり こ き もつ しんしん せめほるぼ
を受けて修する事一つ也。此の機を以て身心を責滅すより
ほか べつ ぶつぼう し わ ほう はい おち ひと き た
外、別に佛法を知らず。我が法に入らんとする人は機をひつ立
て、まなこ に おう ふう どうあく まごうふく ぎょうぞう き う に おう しん
眼をすえ、二王不動悪魔降伏の形像の機を受け、二王心
まも あくごうぼんのう めつ こらい こ ぶつぞう さたし
を守りて、悪業煩惱を滅すべし。古来より此の佛像の沙汰し
ひと き い か わ むね そうおう もち ばん
たる人間かねども、如何にしても我が胸に相應して用いて萬
じ じ ゆうなり ほとけ ゆうもうしょうじん しょきょう おお と たま み
事に自由也。佛は勇猛精進と諸経に多く説き給うと見え
たり。こ き う 受けずして ぼんのう か ことあ べからず だいいち
に佛像の機を受くると云う事を能く知るべし。無精にして此
の ぎょうつ もつば ぶつぞう まなこ つげ にろく じちゅう こんごうしん
機移るべからず。専ら佛像に眼を著て二六時中、金剛心
まも なり
を守るべしと也。

いちにちしめ いわ ぶつどうしゅぎょう い に おう ふう だいけん ご き う
一日示して曰く、佛道修行と云うは二王不動の大堅固の機を受け

て修する事一つ也。
しゆ ことひと なり

ある日、鈴木正三和尚は、弟子達に向かって言われた。仏道の修行をするということは、二王不動の大堅固の機を受けて修行することが大事である。仏道修行とは、私ども禅門にとっては、坐禅のことです。すなわち、坐禅の修行というのは、二王様や不動様のように厳しい心、激しい心を持って坐禅をする以外にはないというのであります。

日本曹洞宗の開祖道元禅師は、中国の天童山で如浄禅師のもとで修行をしていました。如浄禅師は、修行に対しては厳しい人でありました。ある日、道元禅師が坐禅堂で坐禅をしていると、隣で坐禅をしていた僧がコックリ、コックリと居眠りをはじめました。これを見て如浄禅師は、自分の履いていた靴を脱ぎ、それでもって僧を引っ叩いたのであります。「坐禅する時は、身も心も滅却して、三昧になって坐禅に没頭すべきものだ。居眠りするとは何事だ」と叱責したのであります。鈴木正三和尚は、生きた坐禅の修行をするということは、「二王様や不動様のように何ものにも破壊されず、何ものをも寄せ付けない、あの勇猛な機を受けて修行する以外にはない。」と言われるのであります。

此の機を以て身心を責滅すより外、別に佛法を知らず。
こ き もつ しんしん せめほろぼ ほか べつ ぶつぼう し

お寺の山門の左と右に二王像が安置されているのを見た人は多いでしょう。こわい顔をした像ですが、お寺の入り口に何時でも立っているので、仏像の中では、みんなに最も親しまれ、良く知られる仏像です。二王像の足をふんばり腰を据え、胸を張って立つ姿は、実に力にあふれ、すさまじいほどの怒りの形相を見るにつけ、足の爪先から頭のとっぺんまで、気力が満々と満ち溢れているのであります。気力が充実するとは、どういうことか？ 気力を充実するということは、肩肘張ってそっくり返ることではありません。ゆったりと、どっしりと

して、しかも内に犯すべからざる凜然とした氣力を蓄えているというのが、氣力が充実しているということなのです。明日、直心影流「法定之型」の合同稽古がありますが、この「法定」というのは、正に鈴木正三和尚のいう「二王の氣」を発して行うものであります。「宇宙乾坤の氣」を我が全身に受けて、行じる坐禅であり、正に「活禅」であると言えるものであります。坐禅を始める際に、欠氣一息した後、数息觀に入りますが、この際も、「法定」の阿吽の呼吸を2～3回行うことによって氣力が充実し、坐禅の姿勢が決まります。これによって、臍下丹田に氣力が充実し、その氣力が全身に行き渡るのであります。居眠り半分で坐禅を何十年やっても、何にもなりません。二王不動の機をもって心身を攻め滅ぼす。「心身を攻め滅ぼす」とは、「おれがおれがという心」を打ち破ること、即ち、自己のエゴ・自我を殺し尽くすことであります。その自我を責め滅ぼすために坐禅をするのであります。坐禅によって相対的思考を脱却して公案三昧、公案と一体になって坐蒲団上で死にきて、初めて「自己本来の仏性」を徹見するのであります。そういう坐禅を坐蒲団上で死に切ると言うのです。「自我」すなわち「虚妄の我れ」を布団上に於いて打ち殺し、大死一番絶後に再蘇して、「真実の我れ」が、天上天下唯我独尊と誕生するのであります。

わ ぼう はい おも ひと き た まなこ に おう ぶ どうあく
 我が法に入らんと思う人は機をひっ立て、眼をすえ、二王不動悪
 ま ごうぶく ぎょうぞう き う に おうしん まも あくごうほんのう めつ
 魔降伏の形像の機を受け、二王心を守りて、悪業煩惱を滅すべし。

「我が法に入らんと思う人」とは、そういう真理を体得しようと思う人は、「機をひっ立て」と、鈴木正三和尚は、ここに「機」の字を用いております。この「機」という字は、発せんとしてはまだ発せざる形で、内に充実して現れないものを「機」というのであります。弓を引き絞ってはまだ発しない機、剣と剣を交えてはまだ技を発しない機、そういう機をひっ立てる。自分の全身に凜々として行き渡るよう

に、その機をひっ立てる。そうして、眼をすえ、二王様が「アー」「ウーン」とやっているように、機をひっ立てて、悪魔を降伏する。悪魔というのは、自我の心、雑念妄想のことで、そういった思慮分別を片っ端から否定するのであります。

古来より此の佛像の沙汰したる人聞かねども、如何にしても我が胸に相應して用いて萬事に自由也。

昔から二王様の形相で坐禅をやれ、不動様のような気力で坐禅をやれ、というように指導した人の話は聞かないけれども、どうしても自分が二王不動ということを用いて修行してみると、すべてに自由自在に応用していくことができる。

佛は勇猛精進と諸経に多く説き給うと見えたり。此の機を受けずして煩惱に勝つ事有るべからず。

お釈迦様は、勇猛精進がたいせつであり、勇猛の心を奮い起こして、一生懸命、真一文字に突き進んで行くことが非常に大切であるということをお経で説いておられる。勇猛の気力を発揮せずに煩惱に勝つということは、到底有り得ないことである。二王のような気力を奮い起こして、自分の妄念の起こる根元を見据えて、根元からズバツと切って行くほかに、これに勝つ手段はない。もしそれが出来なければ、我々は妄念に押し流され、煩惱に押し潰され、自分の主体性を失って、つねに煩惱妄想に、こき使われ、一生を迷いの世界の中に葬り去って行くほかはないのであります。

第一に佛像の機を受くると云う事を能く知るべし。無精にして此の機移るべからず。専ら佛像に眼を著て二六時中、金剛心を守るべしと也。

だから、仏像の機を受けることの大切さを先ず知るべきである。怠

け半分で無精を決め込んでいては、二王の機は移らない。とにかく、二王様とか不動様とかいう仏像に眼をつけて、二六時中、朝から晩まで金剛不動の心を守っていくべきである。

以上が、鈴木正三和尚の「佛道修行とは二王不動の大堅固の機を修する事也」の提唱であります。

次に、前則の類則である「修行と云うは強き心を用いる事也」を講じることにします。

(二) 修行と云うは強き心を用いる事也 (上-8)

いちにちしめ いわ しゅぎょう い つよ しんもち ことなり
 一日示して曰く、修行と云うはなるほど強き心を用いる事
 なり ろくぞく むところほんしんぬすものあこぞくわがこころよわ
 也。六賊とて六處にて本心を盗む者有り、此の賊は我心の弱
 ところおなりしかあいだきつよもちおのこころ
 き處より起こる也。然る間、機を強く用いて、己れが心
 ならつまもみなきむじょうい
 を睨み付けて守るべし。皆聞きそこないて無常と云われて
 はへごをかき無念と云われてアツカリ坊に用いる也。大きな
 あやまなりつよしんまもなり
 る錯り也。なるほど強き心を守るべしと也。

いちにちしめ いわ しゅぎょう い つよ しんもち ことなり
 一日示して曰く、修行と云うはなるほど強き心を用いる事也。

ある日、鈴木正三和尚が弟子たちに示して言われるのには、「修行というものは、出来るだけ強い心を用いるべきで、強い上にも強い心を用いなければ、修行は成就しない。」

ろくぞく むところほんしんぬすものあこぞくわがこころよわところ
 六賊とて六處にて本心を盗む者有り、此の賊は我心の弱き處よ
 おなり
 り起こる也。

六賊といって、外にあるものではなくて、自分の心の内に修行しようという自分の本心を損なってしまふ賊がいる。菩提心を起こし、一所懸命に修行しようとする、それを妨げる懈怠心が起こる。ちよっ

と寒いと、今日は寒いからと言って怠ける。少し疲れると、疲れたから今日は休んで、明日からやろうと言っては怠ける。これは、自分の心の中に弱いところがあり、気力が充実していないから、そういうことになるのである。だから、いやしくも修行しようと思う者は、そういう内賊に負けてはならない。要するに懈怠心は、「我心の弱き処より起る」のである。古来、禅の修行をやりぬくには、少なくとも大疑団・大勇猛心・大信根の三つだけは是非とも必要だといわれております。

釈迦は一切の衆生は皆悉く仏性を具えているという、して見れば、この煩惱具足の自分にも仏性が具わっている筈、自分に本来具わっているという仏性とはどいつであろうか。人間は必ず死ぬものであるが、その生とは何か、死とは何か。人間として生きる上での、これらの根本的な大疑団を抱く。これが修行の原動力である。大疑団を抱いて、その解決のために全力を尽くすのであるが、その解決は容易なことではない。そのために折角修行に志しながら、途中で挫折して退転してしまう者も多いのであります。しかしながら「釈迦も達磨も人なり。臨済も白隠も人なり。我もまた人なり。彼らに出来たことが自分に出来ぬことはない。彼らが1年で出来たことを、自分は10年かけてでも断じてやり抜くぞ」という気概をもって退転しないことが必要であります。これを大勇猛心といい、禅の修行に於いては、特に大切なものであります。

そして禅の修行において、もう一つ大切なのは、大信根であります。この宇宙と人生には不易絶対な真理が有り、釈尊はその真理を体得し、不動の悟りを体得された。その釈迦の悟りと悟りの手段とが歴代の祖師方によって適々相承されている。自分もまじめに修行すれば、釈尊と等しい悟りを体得することが出来るということを信ずる。これが大信根であります。

道元禅師は、『普勸坐禅儀』という書物の中で、仏祖の正伝の「坐

禅」というものは、まさに仏祖の心印を直指端的に伝える、身心脱落の三昧であることを示されております。学道というものが本格に行ぜられるためにはそのような仏の法に対する「大信根」というものがどうしても樹立されねばなりません、もしこの「大信根」がないと、菩提心は発せられることはないのです。このような意味で、菩提心というものは学道の始終を一貫するもので、初めと終わりとで、その本体の違いはなく、非常に重いものなのであります。もし仮に、菩提心というものが無く、ただ私一個人のために禅の修行がなされるとすれば、ほんとうの仏の「道」を明らめ、自分の心の「本来の面目」に還り、この世に人間として生を享けた本当の意味を噛みしめる学道とはならないのであります。菩提心とは、仏の願を自分の願とする心であるとも言えるのであります。仏の願というのは、私共が何時も唱えている『四弘誓願』であります。

衆生は無辺なり誓って度せんことを願う

煩惱は無尽なり誓って断ぜんことを願う

法門は無量なり誓って学ばんことを願う

仏道は無上なり誓って成じょうぜんことを願う

この仏の四弘の誓願を、己の誓願として肚に入れるということが肝要なのであります。これについては、東嶺禅師が『宗門無尽燈論』の中で、この四句の中の第一句が最も大切であり、第二句以下は全て第一句のためにあるのだと言い切られておられます。これが大乘仏教の精神であり、我々みんなの修行の規範であります。みんなで把手共行して、こちらの（迷いの）岸からあちらの（悟りの）岸に渡ってゆこうというものであります。これは居士禅者の悲願であり、祖師禅を標榜するものの基本であります。そして教団の『立教の主旨』はこれを最初の項目として「一、我が教団は、自利利他の願輪を廻らして、本当の人生を味わいつつ、世界楽土を建設するのを目的とする。」と掲げているのであります。

最後の総括でも触れますが、鈴木正三和尚は、この仏の誓願を一生忠実に護持された希有な方であります。

しか あいだ き つよもち おの こころ なら つ まも
然る間、機を強く用いて、己れが心を睨み付けて守るべし。

鈴木正三和尚は、妥協する心、怠ける心が生じたならば、そういう心をグッと睨みつけて、心の機をひっ立てて全気力を集中して、懈怠心に負けないように努力しなければならないと言われる。

みな き むじょう い
皆聞きそこないて無常と云われてはへゴをかき

ところが、世間では、仏教の言葉をいろいろと聞きそこなうのである。無常という、へこたれてしまう。無常だからこそ、努力すれば向上もするのであります。もし固定しているならば、幾らあがいたところでどうにもならない。無常であるから、すべてが流転し、時とともに変化し、努力すれば向上もし、怠ければ下落するのである。もし全てのものが流転変化しないならば、幾ら努力したところで、われわれ自身も生まれたままで向上しないだろう。道元禅師が『正法眼蔵』の中で、「修善の者はのぼり、修悪の者はくだる」と言われている。人間というものは、一箇所に留まっていることは出来ない。必ず進むか落ちるか、進歩するか退歩するか、どちらかであります。

余談になりますが、私が人間禅に入門する前、3年間、毎朝臨済宗の寺で坐禅を組みました。その早朝坐禅と一緒に坐っていた先輩居士から言われました。「坐禅を止めたら元の木阿弥だよ。」この言葉は、今でも私の脳裏に生々しく残っております。

むねん い ぼうもち なり おお あやま なり
無念と云われてアツカリ坊に用いる也。大きな錯り也。なるほど強き心を守るべしと也。
つよ しん まも なり

あるいは、無念というと、ぼんやりして何も考えないことだと思っただら、大間違いである。無念とは、妄念の無い正念のことをいうので

あって、一切の妄想・分別を捨て去った赤子のような心をいうのであります。坐禅和讃で「無念の念を念として」というくだりがありますが、空っぽになった自己を今、直面している対象の中に投げ込むこと。これが正念相続であります。坐禅というものは、強い気迫を起こして、坐らなければならないのであります。

本日の二則は、鈴木正三和尚の特徴を遺憾なく表している則であります。しかし実は、古来の祖師方は、皆この正三和尚の二王のような強き心を持って修行を全うされた方ばかりであり、その例外はないのだということを学人は知るべきであります。

慈明禅師の引錐の故事しかり、正受老人の狼の出る墓場での正念工夫の修行等枚挙にことかかないことを学人は思い起こし、正三和尚の二王の気を持つての修行の打ち込み方をあらためて自分の修行の鑑としなければならないのであります。

また、この正三和尚の二王の強き心が何処から湧き出てきているかにも、思いを深める必要があります。この大勇猛心の因ってくる源泉は二つあります。

一つは、正三和尚がその生涯を掛けて示している大慈悲心がこの源泉であります。本日も先程『四弘誓願』のところで申し上げましたが、自分のための修行ではないところに、この強い心の秘密があるのであります。これが人間というものであります。

もう一つは、これも本日既にお話ししました大信根が関係しているのであります。大信根・大疑団・大勇猛心は修行の三つの要訣であり、それぞれが深く関連しているのであります。大信根が本当に揺るぎなく徹底しているからこそその正三和尚の二王禅があるということをしっかりと見ておかななければならないのであります。表面に出てくる正三和尚の二王禅の源泉には、徹底した深い大信根があることを見ないと正三和尚の強き心で修行をせよということが本当には拝めないのでは

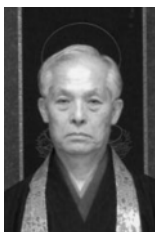
ります。この道を志す学人の忘れてはならないところであります。

今日の提唱はこれで終わります。

(平成19年4月20日、豊橋市金西寺における修禅会の提唱より)



著者プロフィール



丸川春潭（本名／雄浄）

昭和15年生まれ。大阪大学理学部卒業。住友金属工業技監、日本鉄鋼協会理事を歴任。元大阪大学特任教授。現在、中国東北大学名誉教授。工学博士。昭和34年、人間禅立田英山老師に入門。現在、人間禅教団総裁・師家。庵号／葆光庵。



延時真覚（本名／道春）

昭和16年、鹿児島県生まれ。昭和40年、熊本大学理学部卒業。平成14年、ウエルファイド(株)退社。剣道教士七段。昭和52年、人間禅松崎廓山老師に入門。現在、人間禅師家。庵号／芳雲庵。